

【イントロダクション】

● 皆の研究計画書から読める「記号で意味を伝える伝える」という共通の根本課題

- ところで、なぜ、どのように、意味が伝わるか？「意味」とは何か？ まずは何を手掛かりにして「意味」を探求しはじめたら良いか？
- そもそも「単なる物質が意味をもつ」という驚くべき現象。そして「物質がなぜ意味をもつのか」という根本的問題へ

哲学には様々な難問があるが、その中でも横綱級なものとして「意味の成立」という難問があります。言葉はどのように意味を持つのか、言葉はなんで通じるのか、と言いかえてもいい。とこう書いた単なる『インクの滲み』が複雑な模様にすぎないのではなく、一定の意味を担っていて、日本語を知っている人にそれを伝えることができるのは不思議です。こうした問いかけの背後には、漠然と、単なる物質だけから成っている『インクの滲み』の構造をどこまで精密に調べても『意味』は発見できないだろう、という想定がある。

そして、この問いに答えるには、どうしても物質ではないもの、精神的なもの、心に関わるものが必要になってくるような気がするのです。すなわち、これはもっと通俗的な『心身問題』と同じ問いに収斂すると言っていいでしょう

（中島義道『生き生きした過去：大森荘蔵の時間論、その批判的解読』東京：河出書房新社、2014年、18-19頁。）。

● 論文精読：渡辺裕「音楽における意図と意味」をなぜ読むか

- （さまざまな側面において、実践的に）研究作法を知る（論の展開、主張の仕方、先行研究の使い方、注釈の使い方、資料収集、他）
- 「記号が意味をもつとはどういうことか」を考えはじめるとの糸口（芸術における基本的な研究的視点の一つ）を知る。
- 哲学的視点や探求（身近にあって自明視されたものに対する考察）から意義ある作品コンセプトの創出を期待する。

【0段落目-p.83】

- 概念（concept）－観念（idea）
- 問いの背景としての20世紀における言語の新しいとらえ方（言語論的転回）

【1段落目-p.83】

- 〈従来の意味論〉からコミュニケーションを基軸とする〈関係性をともなった意味論〉への視点の変化
- 〈コミュニケーション〉とは？

【2段落目-p.84】

- 「プラグマティクス」(84頁) = pragmatics 「語用論」

語用論 (pragmatics)

語用論とは1930年代に提起された記号論における3つの区分のうち、統辞論(syntax)、意味論(semantic)とならぶ第3の部門。統辞論は言語と言語の結合を、意味論は言語と指示物との関係を、そして語用論は言語とその使用者との関係を研究するもの。つまり語用論とは、言語それ自体の仕組みのみに着目することなく、むしろ話し手と聞き手とのコミュニケーションの場における実際の言語使用に着目してその意味を探っていく視点。語用論の登場は20世紀前半（1930年頃）であったが、研究成果が本格的に世に問われ始めたのは1960-70年代からであった（今井、p187）。語用論の発展に寄与した哲学理論として、ジョン・オースティン、ポール・グライス、ジョン・サールらのいわゆるオクスフォード日常言語学派による「言語行為論」(speech act

theory)がある。その基本的視座は、発話とは自分や相手、そして世界に何らかの影響を及ぼすためになされる行為であり、その過程で意味が生まれるというもの(ジェニー・トマス、p.49)。また後期のウィトゲンシュタインも「言語は生活形式と分かちがたく結びついており、そうした連関から抽象されたところで意味の本質を探そうとすることは哲学的誤りである」(「意味論」『岩波哲学・思想事典』p.99)とした。一方、言語行為論の生真面目さに非現実性をみたフランスの哲学者デリダはサールを批判し、1970年代に「デリダ=サール論争」を引き起こした(以上参考:「語用論」および「意味論」『岩波哲学・思想事典』。今井邦彦『語用論への招待』。ジェニー・トマス『語用論入門:話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』。)

- 人間同士によって「発話された文の(としての)意味」文脈の中での意味(語用論)
 - ←→ 文字自体に内在する要因を主としてうまれる意味(意味論)
- 作品の「意味」を見出すための手段としては、作品の内在的要素に対する形式分析(formal analysis)は適当ではない(音楽作品における和声・楽曲形式・管弦楽法などのいわゆる楽譜による楽曲分析。 絵画における色面、構図、素材などの分析)。

【3段落目-p.85】

- ポール・グライス(Paul Grice, 1913-1988)イギリスの言語哲学者。1967年からカリフォルニア大学バークレー校教授。
 - オースティン、サールらとともに語用論の代表的存在として知られる。字義を超えた意味を探求する「含みの理論」や、コミュニケーションにおける「協調の原理」を提唱した。
- 英語の“mean”と日本語の「意味」とのズレ(本文注釈2参照。meanの「意図=目論む、目指す」の語意が、日本語「意味」にはない件。)

mean: [他動詞] 意図する、…するつもりである; 意味する [古英語 mænan, 古ドイツ語 meinen 「思う、…の意見である」←印欧根 men 「考える」] (「mean」下宮忠雄ら編『スタンダード英語語源辞典』p.315)

- 自然的意味(natural meaning = 「意味する」)、非自然的意味(non-natural meaning = 「意味 NN する」)

【4段落目-p.85】

- 「このハンカチはBが殺人したことを『意味する(mean)』といえないのはなぜか」
- 論文中の疑問点を解消する方法(引用元にあたる。そのための資料収集法)
- C(刑事)からみて、そのハンカチは、他ならぬAによって伝えられたメッセージではない。コミュニケーションではない。
- 原文にある助動詞“should”の訳出の問題
 - ・「義務」 ~すべき
 - ・「可能性・推量」 たぶん、、、だ。、、、のはずだ。
 - ・”should”は、「義務」の強制力は比較的低い。(must > need to > have to > be to > had better > ought to = should)
 - ・”should”は、「可能性・推量」の度合いとしては比較的高い(should > might)(英和辞典『GENIUS-G4』の「should」より)